焼け跡の天使

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
焼け跡の天使

【Ｎコード】
Ｎ３７０１Ｄ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
戦乱により荒れ果てた街に戻ってきたイワノフ。希望も何もない街で彼が出会った少女は。人に最後まで残るものとは何でしょうか。

第一章

焼け跡の天使

何もなくなった世界。ここはそうだった。
戦争が終わり全てが廃墟になった。栄華を誇ったこの古い街も今では瓦礫の山だ。
街にたむろする人々の顔にも生気はない。全てを失くしてしまった彼等の顔には生気はなくただそこでふらふらとあてもなく歩いているだけだった。男も女も。
子供達は痩せこけて今にも死にそうである。当然食べるものもなく誰もが鼠だの雑草だのをかじっている。それがなくなった時のことも考えてはいない。
誰もが絶望して生きる望みを失くしていた。それはこのウラノフ＝リエーカも同じだった。
戦場から帰ったばかりで軍服もボロボロになっている。その金髪も白い肌も汚れており大きな身体をやけに疲れさせている。そうしてそのままふらふらと歩いているのである。
彼もまた他の者達と同じであった。目的も希望もなくただ歩いているだけであった。
「話には聞いていたけれどな」
廃墟そのものの街を見て呟く。
「随分派手にやられたものだな。敵も同じらしいが」
彼の祖国は敵国と激しい戦争を行い遂には双方共その爆撃とミサイルにより国土の全てを焦土にしてしまったのだ。大国や周辺国が止めた時はもう遅かった。何もかもが破壊され民族も幸せも何もない有様に成り果ててしまっていたのである。
この街もそうだった。かつては長い歴史を誇る美しい街だったが今では焦土だ。その焦土を見ても何とも思わないようにもなってしまってきていた。

彼の生まれ育った街だった。しかし今は自分でもそうは思えない。ビルも壊れ家々も崩れ落ちている。道には瓦礫が積もりその間から鼠が見える。人々はそれを追い捕まえられないと雑草を齧っている。中にはもうしゃがみ込んでそこで死を待つ者もいる。ウラノフはその中の一人を見て思った。

「俺も近いうちにこうなるな」

何か何処からか援助の話が出ているらしいが彼はそんなことは信じられなかった。それを信じるには彼の心はあまりにも荒れ果ててしまっていたからだ。

「どうしようもないな」

そう言ってとりあえず道の片隅に腰を下ろした。そうして休むことにした。

「これからどうするかだな」

そうは言っても何も考え付かない。廃墟になったあちこちを見ているだけである。それを見て何をするかという気持ちにはとてもなれない。このまま死のうかとも思いはするが。

疲れ果てていたので暫く寝た。目を醒ますと不意に何かが目に入った。

「何だ？」

一人の黒髪の少女だった。白い服を着て白い肌にやけに大きな目を持っている。何処となくこの辺りの女ではなくアジア系に見えた。しかも彼女には翼があった。

黒い大きな翼だった。烏のそれに似た。それが羽ばたくと漆黒の羽根が舞い散るのが見えた。ウラノフはそれを天使のものには思えなかった。

「悪魔、じゃないな」

それも何となくわかった。

「じゃあ。何なんだ」

その少女を見ながら思う。しかしそれは一瞬のことだった。

翼が見えたのは一瞬だった。次の瞬間彼の前にはその少女がいた。

穏やかな顔で微笑んで彼に声をかけてきたのであった。
「どうしたの、こんなところで」
「休んでいるだけだ」
彼は少女を見上げてこう答えた。言葉にも特に感情は込めてはいない。無機質に答えるだけであった。たったそれだけのことであった。
「ただな」
「こんなところで休んでいてもよくないわよ」
「大きなお世話だ」
やはり感情を込めない声で述べた。
「そんなことはな」
「いいの、別に」
「ああ、別にいい」
また答える。
「どうせこれからおしまいだ。それで起きて何になるんだ？」
そう少女に問うた。たまりかねた調子で。
「何にもならないだろう。だったらこのままで寝ているさ」
「生きたいと思わないの」
「思わないな」
そんな気には全くなれなかった。
「何でそう思えるんだ、今のこの街で」
「私はそうは思わないけれど」
「御前だけだろう、それは」
珍しく感情が言葉にこもった。しかしそれは冷笑であった。
「あまり笑わせるな」
「別に笑うつもりはないし」
「じゃあ何で俺の前にいるんだ？」
虚ろな目なのが自分でもわかる。わかっていてもそれを変えることはできなかった。また変えるつもりもない。そんな気力ももうなかった。

「からかいに来たのか？」
「そんなことはしないわ」
しかし彼女はこう答えるのだった。
「全然ね」
「そうか」
「ええ、そうよ」
またイワノフに答えてきた。
「ただ。貴方にあげたいものがあるだけ」
「何だ、そりゃ」
「これ」
そう言って彼に差し出してきたものは。それは一個のパンだった。白い大きなパン、それを彼の前に差し出してきたのであった。
「あげるわ」
「パンか」
イワノフはそのパンを見て呟いた。
「それを俺にくれるのか」
「欲しくなかったら別にいいけれど」
「いや、もらう」
だが彼はこう答えた。
「くれるんだったらな」
「欲しいのね」
「言い換えればそうだ」
ゆっくりを右手を動かした。そうしてそのパンを手に取るのだった。
「腹が減ってるからな。戦争の最後の方からまともなものは食っちゃいなかった」
「それは皆そうよね」
「ああ、そうさ」
パンを口に入れる。その柔らかさとほのかな香りが口の中全体に伝わる。久し振りに食べる白く柔らかいパンだった。イワノフはそ

れを貪るようにして食った。

第二章

「皆な。こんなパンなんて今は夢みたいな話だ」
「そう、夢なの」
「夢じゃなかったら妄想だ」
こうまで言う。
「昔は違ったけれどな」
「そうなの」
「奇麗で。平和な街だった」
食べ終えた彼は不意に昔の日々を懐かしんだ。あの青い空はそのままだがそれ以外は全く変わり果てている。それも目に入っていたのだ。
「それが。戦争でな」
「何もかもなくなったのね」
「本当に何もなくなってしまったな」
少女に応えてまた呟く。
「奇麗にな。俺の家族も皆死んじまった」
「皆？」
「ああ、皆さ」
また言う。
「爆撃でな。瓦礫の下でくたばっちまった」
彼の家族のことは知っていた。戦争の中頃のこの街への大規模な爆撃で家族は家ごと全員死んだのである。この街に戻って最初に家のところまで来たが本当に瓦礫の山になっていた。それが何よりの証拠だった。彼にはもう帰る家も温かく迎えてくれる家族もいないのだ。それが嫌になる程わかっていたのだ。
「だから。俺は一人さ」
「一人なの」
「珍しくとも何ともないさ」

彼はそう少女に述べや。
「この戦争じゃ皆そうさ」
「ふうん」
「ふうんっておい」
彼は少女があまりにもこの戦争のことに無知なので思わず問うた。
「御前この街の人間か！？」
「いいえ」
それは違っていた。彼女はそのことを首を横に振って否定した。それが何よりの証拠であった。自分自身で示してみせた証拠であった。
「違うわ」
「だったら何処の奴だ！？」
彼は不審さを露わにさせて彼女に問うた。
「この街の人間じゃないとしたら」
「何だと思う？」
少女は逆にウラノフに問うてきた。
「私が何かは」
「さあな」
今はあまり考えられない。深く考えるにはあまりにも疲れ果てていた。しかし危険なものは感じなかった。戦場でそうしたものを散々感じてきたが今は感じなかったのだ。
「とりあえずは危ない人間ではなさそうだな」
「そう、人間なの」１２
少女はそこに何か言いたいようであった。
「私が」
「！？」
ウラノフは少女の言葉に違和感を感じた。それと共に最初一瞬だけ見たものが脳裏に浮かぼうとした。だがそれが浮かび上がるより前に少女が言ってきた。
「じゃあそれでいいわ」

「いいっておい」
「ところで。立たないの？」
「ああ、暫くはな」
彼はこう答えた。
「どうにもな」
「やっぱり疲れているからなのね」
「その通りだ」
パンを食べていささか楽になったとはいえまだ疲れ果てている。だからこう答えたのである。
「このまま死ぬのかもな」
「死ぬつもり？」
「そのつもりはない」
それは否定するのだった。
「けれどな。それでも」
「生きられないのね」
「今は皆そうだ」
イワノフは諦めきった声で述べた。少女を見ているがそこに見ているのは希望なぞではない。それとは全く異なる暗鬱としたものでしかない。
「誰だってな。わかるよな、それは」
「ええ、わかるわ」
少女も彼の言葉にこくりと頷く、それを否定することはなかった。
「けれど。それには早いとも思うわ」
「早い？」
「ええ」
また彼に答えた。
「私はそう思うのだけれど」
「じゃあどうしろっていうんだ」
彼は嘲笑を込めて尋ねた。だったらどうするのかと。そう問うたのだ。

「今の俺達が」
「動けばいいわ」
それが少女の返事であった。
「動けば。それだけでいいわ」
「動いて何になるんだ」
イワノフはそれもまた否定した。何かを肯定する気持ちにはもうなれなかった。ただ何処までも疲れ果てていた。その彼に動くことはできなかった。

第三章

「何もかもがなくなったってのによ」
「何もかもなのね」
「そうさ、何もかもだ」
また言った。
「戦争で全部なくなったんだ。それでどうやって」
「また作ればいいじゃない」
諦め果てた声しか出さないイワノフに告げた。
「それなら」
「それなら？」
「ええ、それならよ」
また彼に言うのだった。
「作ればいいだけよ。違うかしら」
「夢物語だな」
またしても少女の言葉を否定した。それもすぐに。
「まさかそんな言葉を聞くとは思わなかったぜ。笑っていいか？」
「笑いたいの？」
「その馬鹿な言葉にな」
こう言い返すのだった。
「笑いたいものだぜ。笑う気力もなくなってきたけれどな」
「いいわよ、笑っても」
笑う気力がないと聞いてもあえて言ったのであった。
「笑いたければ」
「気力ももうないのにか」
「気力が欲しかったら立って」
またイワノフに言う。
「私が言いたいのはそれだけよ。そして」
「そして？」

「前に進んで」
そう彼に告げるのであった。
「ただ前にね。それだけでいいから」
「それで何かなるのかよ」
「少なくとも今よりはずっとましになる筈よ」
少女はそう述べて笑った。うっすらとであるが優しい笑みであった。
「きっとね」
「きっとか」
「ええ」
「信じていいんだな」
あらためて少女に問うた。
「今のその言葉をよ」
「信じなくても別にいいの」
それはいいとまで言う。イワノフはその言葉を何故か受け入れた。少なくとも拒むことはなかった。そうするには少女の言葉はあまりにも優しかったからだ・
「けれど。立ちたいなら立って」
「立ちたいなら、か」
「多分。天使はこうは言わないわ」
ふと天使という言葉を出した。それと共に顔に微妙な嫌悪感を漂わせるのであった。
「多分だけれど」
「あんたは天使じゃないのか」
「違うわ」
そのことは否定してきた。それもわりかし強い声で。
「だから。そういうことは言わないのよ」
「へえ、そうかよ」
「けれど立ってとは言うわ」
それは言うと告げる。

「私は。そう言う考えだから」
「じゃあ立てばいいんだな」
「そうよ」
またイワノフに述べる。
「貴方がそうしたいのならね」
「正直今さっきまではそんなつもりにはとてもなれなかったさ」
少し笑った。といってもさっき笑ってもいいか、と問うた時に考えた笑みではなかった。それとは別の、少し明るい感じのする笑みであった。
「だが今は」
「違うのね」
「ああ、まずは立つんだな」
「そうよ」
また彼に言った。
「そして次に」
「前に進む」
イワノフは今度は自分から言うのだった。
「そうだよな」
「ええ。できるかしら」
「さっきまではとんでもなく難しい話だったが今は違うな」
これは彼の心が変わったからだ。全く異なってきていた。
「俺も今から」
「歩けるのね」
「少しだけならな」
それが今の彼の返事であった。
「歩けるさ」
「だったら。歩くといいわ」
少女はにこりと笑ってイワノフに声をかけるのだった。
「そうしてね。見て」
「わかったさ。それじゃあな」

イワノフもその言葉を受け入れる。そうして前に向かって歩く。瓦礫まみれの道であったがそれでも歩く。その後ろには少女が笑っているが今は彼女の方を見なかった。

第四章

そのまま先に進むと人が集まっていた。小さい声だが活気もあった。

「活気・・・・・・何だあれは」

イワノフはその活気に気付いた。そうして何かと思った。

「今のこの国に。何を見ているんだ」

そうは思ったがそれでも気になった。もっとはっきり言えば興味を持ったのである。

それでそこに行ってみた。見れば食べ物を配っていた。

「食い物か」

「そうさ、食い物さ」

そこにいた一人が彼の言葉に応えた。見れば明るい笑顔になっている。

「美味いぜ」

「美味いのか」

「ああ、雑草とか鼠とかよりずっとな」

そうも彼に言ってきた。明るい笑顔で。

「美味いぜ。オートミールだ」

「オートミールか」

それを聞くと自然と口の中に唾液が溜まる。それを感じて彼は我慢できなくなっていた。さっき食べたパンの分はもう減ってきていた。気付けば空腹がまた彼を支配しようとしていたのだ。

「どうだい、あんたも」

「ああ、頂くか」

「皆食べてるぜ」

「皆か」

見ればさっきよりもずっと人が集まっていた。彼等もまた笑顔でそのオートミールを食べている。集まりの中心には鍋があり東洋風

の大きな椀にオートーミールを入れて人々に配っていたのであった。湯気まで出ていてその温かさもまた魅力的に見えた。
「なあ」
　そのオートミールを配る者達に声をかけた。見ればここの人間ではない。
「！？」
「あれ、こっちの言葉がわからないのか」
　見ればアジア系の人間だ。それはわかる。
「何処の国の人間なんだ、あんた達は」
　それでも言ったがやはり今声をかけた相手からは返事はない。ひょろっとした感じの人のよさそうな青年だが返事はないのであった。
「あっ、彼はまだこっちの言葉わからないので」
　その隣の黒い髪の若者がイワノフに声をかけてきた。
「すいません、何でしょうか」
「ああ、あんたはこっちの言葉がわかるのか」
「はい、大学で勉強しましたので」
　その黒髪のアジア系の若者はそうイワノフに答えた。
「それで日常会話程度でしたら」
「そうか。それじゃあ聞くが」
「はい」
　お椀を受け取るとそこにオートミールが入る。白いミルクの中に大麦がある。それも尋常な量ではない。しかもそこには鶏肉や茸、野菜まで入っている。少なくとも彼が最近食べたような薄いオートミールなぞではなかった。全くの別物であった。
「あんた達は何処から来たんだ？」
「日本からです」
　黒髪の若者はこう答えてきた。
「日本！？」
「ええと、ユーラシアの果てにある国です」
　そう彼に説明する。

「島国で。御存知ないですかね」
「学校で習ったかも知れないが忘れた」
彼は首を捻ってそう述べた。
「悪いがな」
「そうですか」
「まあそれはいい。どうしてこの国に来たんだ？」
「ボランティアです」
若者はまたイワノフに答えた。
「ボランティア・・・・・・」
「簡単な話でお助けに参りました」
また述べた。
「些細なことですけれど」
「じゃあこのオートミールはそれか」
彼はここまで聞いて話を理解した。
「そのボランティアで」
「この国のお話は聞きました」
若者は戸惑いながら、だがそれでもしっかりとした声で彼に言うのだった。
「僕達、何もわかっていないかも知れません。けれど」
「助けに来たっていうのか？」
「そうです」
またイワノフに言うのだった。何か戸惑いがちなのは何故だろうと思いながらもイワノフは彼の話を黙って聞いていた。
「いけませんか、それは」
「別にそうは言わないが」
思いもしない。ただオートミールが嬉しいだけだ。
「いいんですね、それじゃあ」
「まあな。食えるのは事実だしな」
「有り難うございます、そう言ってくれると助かります」
彼は今のイワノフの言葉に笑顔になった。

「僕達も」
「そんなに嬉しいのか」
「さっきも言いましたけれどここの話は聞いていました」
彼はまたそれを言う。
「それでも予想していたよりずっと酷くて。どうしようかって思っていたんです」
「どうしようかか」
「僕達に何かできるかなって。けれどそれも」
「それも？」
「喜んでもらえるのならやりがいがありますね」
「そうだな」
イワノフは熱いオートミールを口にした。その熱さと旨さを口の中で味わいながら答えるのであった。
「少なくとも自分では何もせずに他人を罵ってばかりの奴よりはずっといい」
「ですよね。僕もそう思います」
「けれどな、言っておくぞ」
イワノフは言う。若者を斜めに見ながら。
「ここで食ったからといってどうにかなるわけでもない」
「どうにかなるわけでも？」
「そうだ。何もかもがなくなった」
自分の国のことを述べる。わかっているとはわかっていてもあえて言うのだった。

第五章

「何もかもがな」
「そうですか」
「まあここで食べるものが手に入ったのは有り難い」
それは素直に頷いた。
「けれど。どうなるのかは」
「そこまでは僕達は」
「別にあんた達を責めているわけじゃない」
それは否定した。
「だがな。ここまで壊れたんだ。もう何をすることも」
「できませんか。どうしても」
「俺はそう思う」
その考えは変わらない。変えようがないと彼自身思っていた。
「それでもやるのならいいがな」
「ですか」
「ああ、これな」
食べ終えたお椀を若者に差し出した。
「とりあえず有り難うな」
「どうも」
「じゃあな。またな」
「どうされるのですか、これから」
「何とか暫くは生きることができる」
腹がふくれたせいだ。実に現実的な言葉であった。
「とりあえずまた歩いてみるさ」
「そうですか」
「ああ。だからな」
「またどうぞ」
「日本には感謝するさ」

最後にこう言うのだった。
「このことはな。ずっとな」
「有り難うございます」
「礼はいいさ」
だがそれにはやはりつっけんどんに言葉を返すだけであった。
「どうせそのずっともほんの少しの間だけだからな」
そう告げてまた前へ歩いていった。歩くだけの体力は充分に回復したがそれでも気持ちが晴れることはなかった。だがそれもすぐに変わるのだった。
前にあったものは。彼が思いもしなかったことだった。
「何をやってるんだ、今度は」
それを見てまずはこう言った。
「一体」
「見ればわかると思うけれど」
「御前、どうしてここに」
後ろに少女がいた。今度は思わずそちらに顔を向けた。
「ここに来るのがわかっていたから」
一言でそう述べるのだった。
「オートミールを食べてここにか」
「ええ」
イワノフの問いにも答えてみせてきたのだった。
「その通りよ」
「まさか。それがわかっていたのか」
「わかっていたわ」
また言うのであった。
「全部ね」
「じゃああれか」
イワノフはそれを聞いて少女に言葉を返すのだった。
「俺にあの中へ入れっていうのか」
「入るわよね」

強制はしない。そのかわりにこう言うのだった。
「貴方はそうするわ」
「そうだな」
自分でもそれを否定しない。そうしたいという気持ちが心の中から湧き出てきているのをはっきりと感じていたからだ。どうしようもないまでに。
「瓦礫をどかして」
「建物を建て直している」
二人はそれぞれの口で述べ合う。
「それだけのことだけれどな」
「けれど。それが何なのかはわかるわよね」
「わからない程俺は馬鹿じゃないつもりだ」
それが彼の返答だった。
「何もなくなってもまだ」
「なくなったら作り直せばいいの」
少女は静かにイワノフに述べた。

第六章

「それだけなのよ」
「それだけか」
「ええ、それだけ」
またイワノフに言うがその言葉はまるで彼の心の中に言うようであった。静かに彼の心の中に入りそのまま滲み込む、そうした言葉であった。
「それだけなのよ」
「今まで俺も誰もかもが絶望していたが」
「人は絶望もするわ」
少女はそれは否定しようとはしなかった。
「人間なんだから。当然よ」
「当然か」
「けれど。絶対立ち直れるものなの」
そのうえでまた言うのであった。
「何があってもね」
「じゃあ俺も。この国も皆も立ち直れるんだな」
「ええ」
彼の言葉をまた認めた。こくりと頷いて。
「わかったわね。それじゃあ」
「ああ、行くさ」
前で人を集めていた。そこに向かいながら述べる。
「このままな。そして生きてやる」
言葉に力が入っていた。もうそれは完全に柱となって彼を支えていた。
「この国と一緒にな」
「頑張るのよ。じゃあ私はこれで」
「あんた、まさか」

ふとここで最初に見た場面を思い出した。それは。
「天使なのか」
「違うわ」
少女は微笑んでそれは否定した。
「天使みたいに厳しくはないわ。あんなふうに絶対でもないわ」
「じゃあ一体あんたは」
「見て」
翼を出した。その翼の色は。
「黒、か」
「そう、これが私の翼」
自分の背中にあるその漆黒の翼を見せていた。それは大きく羽ばたきまるで全てを覆うかのようであった。その翼をあえてイワノフに見せていたのだった。
「これでわかってくれたかしら」
「ああ、よくな」
彼女が誰かはわかった。しかしそれを笑顔で受け入れることができていた。
「そういうことだったのか」
「本当はこんなことするつもりじゃなかったわ」
少女はその静かで清らかな声でイワノフにまた告げた。
「本当はね」
「それでどうして」
「この国の人達を見ていると。どうしても」
我慢できなかったのだ。そういうことであった。
「そういうことだったのか」
「それに貴方もね」
「俺もか」
「もう立つ気はなかったでしょう」
最初に会った時のことを問うてきた。
「あのまま。ずっと」

「ああ、その通りさ」
イワノフはそれも認めた。
「もうな。あのまま寝ちまうつもりだったさ」
「わかっていたから。だから」
「そうだな。寝るのにはまだ早かった」
今それがわかった。まだその時ではないと。
「起きているさ。ずっとな」
「そうしていて。人は何度も絶望して何度も起き上がるものだから」
「それをあんたが言うのか」
「悪いかしら」
「というかな」
少女に対してまた述べる。
「複雑だよな、そこは」
「人を助けるのは天使だけじゃないから」
「むしろ天使の方こそかな」
「そういうものよ。わかってくれたかしら」
「かもな。今はそれを信じられるさ」
天使よりも今ここにいる少女の方が温かい。それを感じながら今前に向かう。
「じゃあな。黒い翼の天使さんよ」
「ええ。頑張ってね」
「そうさせてもらうよ」
後ろから羽ばたく感じがした。そうして上から舞い降りてきたものは黒い羽根であった。ふわふわと舞い降りて来る。
イワノフはそれを手に取った。悪い気はしない。それどころか温かい気持ちになれた。その温かい気持ちを手にして。彼は前に進むのだった。黒い天使の温かさを胸に。

焼け跡の天使　　完

2007・11・15

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3701d/

焼け跡の天使

2010年10月8日15時04分発行